

福祉国家以降の歴史研究における分析枠組み

—福祉を多元的に捉える—

○ 武蔵野大学 野口 友紀子 (4418)

キーワード：吉田久一・池田敬正・福祉国家以降

1. 研究目的

この研究では、社会福祉の歴史研究における分析枠組みを検討する。ここでは社会福祉の歴史研究の2人の巨人、吉田久一と池田敬正を取り上げる。彼らの分析枠組みを踏まえて、福祉国家以降の社会福祉の歴史はどのように考えられるだろうか。

2. 研究の視点および方法

吉田久一と池田敬正による社会福祉の歴史研究の分析枠組みを文献研究によって行い、社会福祉史研究の分析枠組みを追究する。

3. 倫理的配慮

この研究は本学会の研究倫理規程、ならびに研究ガイドラインに基づいている。引用等の記載は本学会の機関誌執筆要領等に則っている。また、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

現在の社会福祉の歴史研究を作ったのは吉田久一である（野口 2024 刊行予定）。吉田は1948年以降、社会福祉の歴史を研究し『近代社会事業の歴史』（1952年）を上梓した。吉田は社会福祉が学問であるためには科学でなければならないと考え、K.マルクスとM.ウェーバーの理論を基盤とした。戦前に発表された社会福祉の歴史研究が皇国史観や啓蒙的な歴史記述であったのに対して、吉田は科学的な分析枠組みによる記述で評価された。

吉田の社会福祉史への成果の一つは、「近代化」を社会事業史に位置付けたことである。吉田は、社会事業の近代化とは、社会事業の民主化が進んでいくことであり、明治維新以降の歴史の中で、社会事業が発展してきたと捉えていた。だが、社会事業は単純な発展ではなく、天皇制的家族共同体の残存や権利性の否定などの問題があり、また民意が反映されることなく制度化や組織化が図られ、戦後の占領下で社会事業の近代化が進められたとした。この一連の流れから、「社会事業の近代化は挫折をくり返しながらも、発展してきたことは否定できない」と述べた（吉田 1967:51）。吉田は高度経済成長以降について社会福祉という用語を使用し、それ以前を社会事業としている。そして、この社会事業の近代化は高度成長以降に形成される社会福祉の前提と述べている（吉田 1990:492）。

一方、1980年代に入り、池田敬正が時期区分の三段階論を述べた。池田は社会福祉理念が普遍的なら、社会福祉の歴史は人類の始源とともに開始されるとして、第一段階を原始社会以来の共同体的規制と身分制的支配に基づく社会で相互扶助に依存する段階、第二段階を共同体的関係が解体し、生存を個人の責任とする段階とした。第三段階は個人の自律を前提にした社会的協同の中で実質的平等を実現する段階で、この段階に社会福祉が形成

されたとした。池田は福祉に内包された普遍的な理念を追究し、社会科学として成り立たせるための歴史分析として、規範分析を基底にした福祉史を主張した。池田は、原始社会における「無産の平等にもとづく生活の共同としての原生的共生」(＝社会共同)を福祉の原点とする(池田 2011:50)。福祉は人類史に貫通する社会現象であり、歴史貫通的な理念である。つまり社会福祉が一つの段階に過ぎない。池田によると第三段階は「現代」のことで、社会事業の時代と社会保障の時代の2つである。この段階は従来の感化救済事業から戦後の福祉国家の形成までの時代を指している。現代に登場した社会福祉は「全国民を対象とする無差別平等の“くらしむきのよさ”としての福祉を、国家的規模で社会的に編成する生活支援のためのシステム」である(池田 2005:169)。これは、社会共同のかたち、「無資産の労働者階級(ワーキングクラス)を含む国家の全構成員が自律的に参加する国家運営にもとづく」ものに変化したものであり、これが福祉国家である(池田 2005:169)。

5. 考察

発展段階論では、福祉国家以降の説明が難しい。この点に関して古川は、従来の研究枠組みは「資本主義社会の発展段階と社会福祉の発展段階を対比させ、両者を結びつけ、関連させて分析するという手法、視点と枠組みによって考察を進めてきた」と指摘し再検討を試みている(古川 2023:268)。

では、池田のいう社会共同の三段階論で福祉国家以降の社会福祉の歴史を説明できるだろうか。高岡は、池田の第三段階(＝現代)の設定そのものを否定する(高岡 2020:20)。池田の民主主義を基準とする第三段階では、1920年代以降の日本の多様な福祉の展開を把握することに成功しおらず、加えて戦後の社会保障確立運動なども捉えられないという。

高岡の指摘した三段階説批判を踏まえると、社会共同としての福祉の歴史では、国家と家族と市場以外に存在する福祉的な活動をする主体が捉えられないといえる。現代の私たちを取り巻く多様な福祉的活動を位置づけるには、国家と家族と市場とそれ以外の福祉的な活動を行う主体の多元的なダイナミズムを捉える視点が必要である。

文献

池田敬正(2005)『福祉原論を考える』高菅出版。

池田敬正(2011)『福祉学を構想する』高菅出版。

高岡裕之(2020)「社会福祉(社会事業)史と「福祉の歴史学」—池田敬正氏の研究を中心として—」『社会事業史研究』58, 11-23.

野口友紀子(2024)「社会福祉史研究の歴史(仮)」『エンサイクロペディア社会福祉学 増補版』中央法規出版、年内刊行予定、ページ番号未定。

古川孝順(2023)『社会福祉学原理要綱』誠信書房。

吉田久一(1967)「近代化の背景 社会事業の近代化」籠山京編『社会保障の近代化』勁草書房。

吉田久一(1990)『現代社会事業史研究(改訂増補版)』川島書店。